風雲の中東地域 ②

小村幸二郎

中東戦争

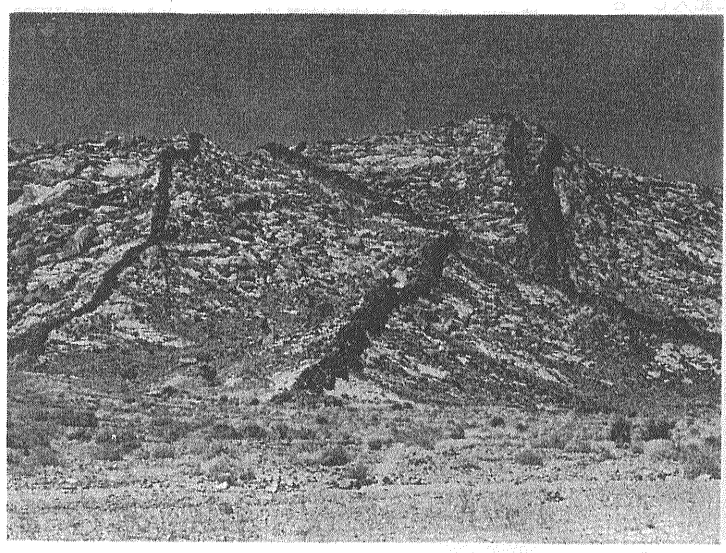
アラブ諸国に革新派絶対優勢の態勢を完備し　その基盤の上に立って　アラブの指導者としての地位確立を目ざすナセルの政策を　親ソ一辺倒ときめつけたサウジアラビアとアラブ連合との対立は　第4回アラブ首脳会議開催をめぐって　激化し　サウジアラビアにおいては軍事力の増強が進められる一方　1966年後半から　軍隊は北方のアカバ湾近くへ移動をはじめ　Jeddah　の周辺には　紅海に沿って沿岸砲が設置され　紅海沿岸には警備隊が配置された（第14　15図）．　1967年に入ると　イギリス製の最新鋭ジェット戦斗機の猛訓練がはじまり国防省の所轄下にあるサウジ航空には新型旅客機が増強され　サウジアラビアとアラブ連合との対立を中心として　中東地域には危機をはらんだ不穏な動きがもり上っていった．　そして　対イスラエルのための共同防衛を目的として設立された首脳会議の開催は全く暗礁にのり上げ　アラブ諸国は保守・革新・中立の3派に分かれ　イスラエルに乗じられる傷口は日を追うごとに大きくそして深くなっていった．　時にはナセルが「サウジアラビアを攻撃する準備がある」と　言明したこともあったがそうした一種の脅迫は　サウジアラビアを中心とする保守派のアラブ連合に対する態度を硬化させるにとどまらず　イスラエルに乗ずる隙を与える結果を生んだ．

第2次大戦後の軍隊によるクーデターによって樹立された新政権の座が10年ないし15年後にゆらぐことを歴史はわれわれに教える．　流血革命の絶えないアフリカの独立国・シリア・イラク等はその好例であろう．　週1度の恒例の演説で　国民に　アラブ連合の経済危機を説き　耐乏生活を訴えるナセルの姿には　アラブ連合の統領としての苦脳とアラブ諸国の指導者としての地位と栄誉を守り抜こうとする悲壮なまでの決意がみなぎっていた（第16図）．　特有の先天性をもち　経済力が異なる国の集合からなるアラブ諸国の中にあって　ナセルが偉大な政治家・指導者として生きてきた根本的理由は「誰よりもアラブを知り抜いていたからである」と考えられる．　そのナセルが　国民への演説を　流血革命による政権の興亡の歴史を熟慮した上で　週一度行なっているかどうかは　もちろん本人以外には分らない．

ナセルの精力的な努力にかかわらず　1966年末近くになって　経済事情および食糧事情はとみに悪化し　閣僚の統一が困難となり　12月下旬　14年前の革命当時ナセルと共に斗った大蔵大臣が　食糧事情問題でナセルと意見が一致せず　ナセルの下を去った．　そしてこの頃から　カイロ市内では　小規模ながら反ナセルの声が起こり　ひそかにやみドルが横行しはじめた．

統治者に対する批判の声　それは食生活の貧困ないし破綻が訪れた時には　必ず大きな渦となって湧き上る．　そして　そのような渦は次第にナセル政権の座におよんだ．

何時果てるとも知れないイエメンの内戦のために父を夫を子供を連れ去られ　失った人々の平和な生活への強い願望　イエメン派兵・援助のために流出する莫大な費用　さらには　アデンの革新勢力テコ入れのための経費等とアラブ諸国の批判の渦中にあって　ナセルの苦悩は　次第に深まっていった．　とくにサウジアラビアのアラブ連合に対する非難は　アラブ連合軍が　イエメンとの国境に近いサウジアラビアの部落に細菌弾を打ち込み多数の死者を出させたことによって一層はげしくなり　2月中旬には在サウジ



第14図　Al Aqabah の南方約 70km　Ethal 付近の風景　ここはサウジアラビア北辺の軍事基地 Tabuk から Al Bad' を経て紅海側へ通じる主要道路と Al Aqabah への道との分岐点である　前面の丘は比高60m前後で約10億年前の花崗岩（灰白色）と岩脈（黒灰色）とからなる

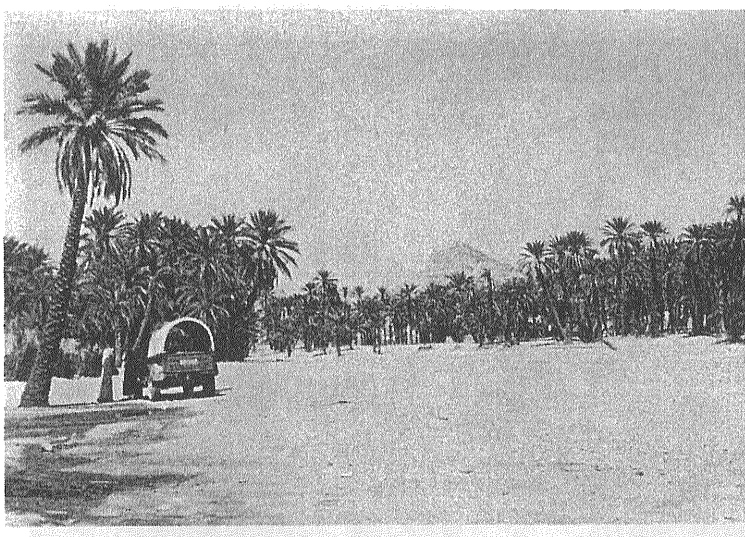
アラビアのアラブ連合銀行の凍結という事態を呼んだ．しかし　サウジアラビアとアラブ連合とのイエメン問題を媒体とする対立は　中立的立場を維持するクエートの仲介による　両者の会談によって休戦協定が成立したことによってその後解消され　ナセルの苦悩の一部は去った．　イエメンに真の幸福と利益をもたらす政府が樹立されるならば　それは　イエメン国民にとってはもちろん　サウジアラビア・アラブ連合　ひいてはアラブ諸国に繁栄をもたらす一助となることは当然である．

この休戦会談の目的からみて　その成立がサウジアラビアの王統派援助およびアラブ連合の革命派援助の完全停止を前提としたことは明らかである．　アラブ連合にとっては　この時のクエートのあり方は　この休戦協定の成立によって当然発生するイエメン革命派に対する援助　アラブ連合軍の撤退によって国内経済を好転させることが可能となるだけではなく　アラブ諸国の非難をやわらげる可能性をもつだけに　将に救世主的存在であった．　しかし　このような協定は　先に述べたジェッダ協定の運命にみられるように　中東ではささいな原因で白紙化する可能性があり　イエメンからのアラブ連合軍の撤退については十分な考慮を要する．　この時点において　ナセルの脳裏には　イエメンからのアラブ連合軍の撤退実現と　それによる国内経済の好転　国民のナセル政権に対する非難　アラブ諸国の批判等を一挙に解消する手段が去来したことだろう．　その最良の手段　それは　誰が考えたとしても　短的な道を選ぶとすれば　アラブの目を共通の敵イスラエルに向けさせることである．　そしてその手段は　イスラエルのアラブ領攻撃に対する報復措置を名目として　イスラエル船のスエズ運河航行禁止　およびチラン海峡封鎖をアラブ連合に踏切らせ　ついには中東戦争の導火線となった(第8　17図)．

しかし　アラブ連合がイスラエルに対してとったこの封鎖は　シナイ戦争発生の直接原因と全く同一であり　明らかに　国際法　パレスチナ停戦協定　1888年にコンスチタンチノーブル（イスタンブール）において決議されたスエズ運河の自由航行に関する国際協定—運河は戦時平和を問わず　いかなる国の艦船にも開放される．封鎖権は行使できない　等—に違反するものであった．とくにチラン海峡の封鎖は　アカバ湾に臨むエイラート港を基地とするイスラエルの極東貿易を完全に停止し　日本へのカリウムおよび燐鉱石の輸入を不可能にした．

両海域の封鎖によって　イスラエルは　その経済発展に大きな制限をうけて　アラブという籠の中に封じこめられた鳥と化した．　四海すべて敵というきびしい制約の中に封じこめられたイスラエルの自由へのあこがれは以前にも増して強く　未だ完全統一に至っていないアラブの隙をつき　アラブ連合・シリア・ヨルダンとの武力対決にイスラエルをかりたて　ようやく灼熱の時を迎えようとする不毛の荒野において　アラブと雌雄を決すべき中東戦争の勃発を招いた．

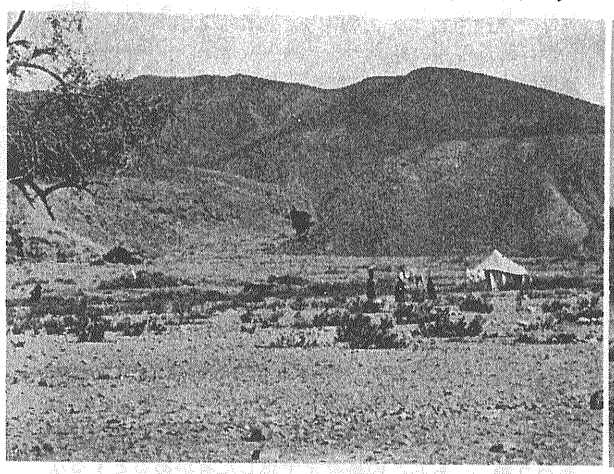
決戦3度　イスラエル軍の急襲に　アラブ軍は周章狼狽の中に敗走を重ね　シナイ半島は完全占領され　戦はわずか3日で終った．　軍事力に勝るアラブ軍勢がわず3か日間の戦斗で大敗し　面積およそ70,000km²におよぶシナイ半島が完全占領されることを誰が予想し得たであろうか．　もしこの事実を予想した者があるとするならば　それは　第2次世界大戦後間もなく来日し　旧日



第15図a　アカバ湾の中央東方約24kmの Al Bad′ 部落のナツメヤシ林　中央の丘は古い珊瑚礁

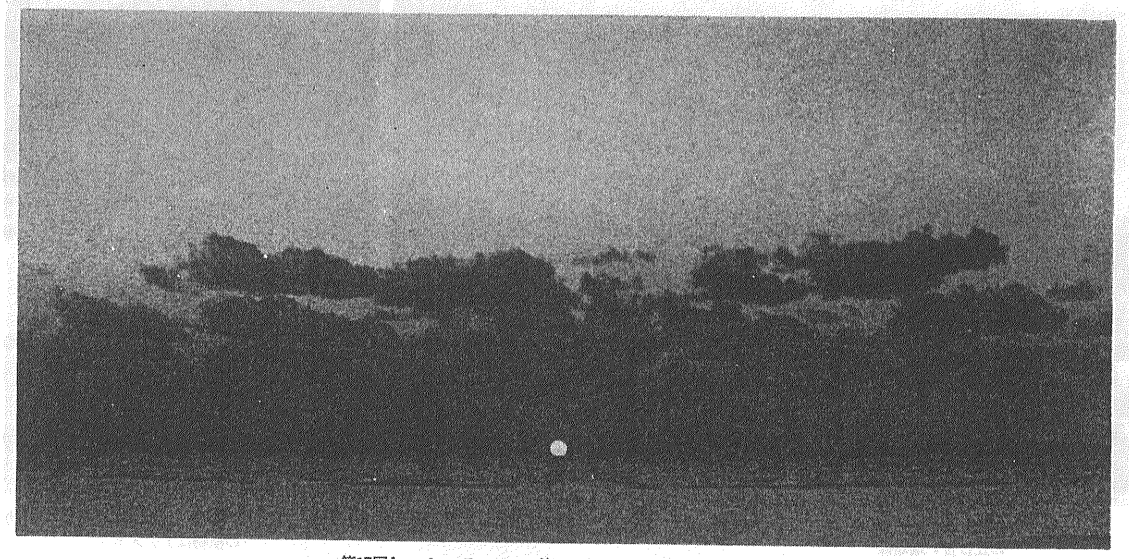
第15図b　Al Bad′ 部落の女性2人　上方の植物はナツメヤシ

本帝国陸軍の指導者に急襲戦法を学んだ　イスラエル軍の作戦将校であったろう．　戦斗開始３日後　ヨルダンとイスラエルは６月７日に　アラブ連合は９日　そしてシリアは10日に停戦を受諾し　アラブ３国は　莫大な損害をこうむって　敗戦の日を迎えた．　聖地エルサレムは再びイスラエルの手中を陥ち　広大なシナイ半島の戦野に残されたものは　焼けただれた膨大な量の軍需物資と崩れ落ちた人影なき家屋　そして指させば染まるかとさえ思える紺碧の空に　はためくイスラエルの国旗だけであった．　戦の後の凉々たる荒野に残された黒い爪跡これらは　やがて訪れる夏のきびしい暑さに焼かれ　天をおおう砂嵐になぶられながら　熱砂の中に朽ち果て　そして埋もれていくのであろうか．　世の多くの人々は中東に再び流血を繰返さぬ　真の平和が訪れることを切に願っているにちがいない．　しかし　アラブとイスラエルの過去15世紀にわたる対立は　その底流がアラビア語対ヘブライ語　イスラーム対ユダヤという　われわれの常識をはるかに越えたものであるだけに　一朝一夕には消え去らないだろう．　この戦の後のアラブ諸国　とくに直接敗戦の憂目をみたアラブ３国が　武力によるイスラエル潰滅をはっきりと表明しているだけに　今後の中東情勢には楽観視できないものがある．　それにしてもイスラエル敵視を国策の１つとし　その軍の大部分を北辺の地に配置するサウジアラビアが　アラブ３国の相次ぐ敗退を目前にしながら　この戦に出兵せず「この戦争に対する態度を考慮中」とだけ表明したのはなぜだろうか．　私には　この表明が　サウジアラビア軍の参戦がアラブ側の勝利に直結しないことを熟知しているサウジアラビアの当然の処置と思えると共に　アラブ諸国の保守派と革新派との間に未だ相容れぬ何かがあることを



第16図　チラン海峡の南東方 130 km Dula 町のはずれに点在するテントとその住民　この人たちはアラブ連合からサウジアラビアへ逃避してきた人たちで　サウジアラビア政府に保護されて生活している

第17図 a　チラン海峡の東方約 50km に位置する Al Khuraybah の部落　ここは古代からシリアのダマスカスとイエメンとを結ぶ街道の要所であったが　現在もシリア　レバノン　ヨルダンからサウジアラビアへの連絡路の中継地となっている



第17図 b　チ　ラ　ン　海　峡　の　落　陽
右手に見えるのは珊瑚礁　太陽の形（下方）に注意

示唆しているように感じられてならない（第18図）.

中東戦争終結処理の苦悩

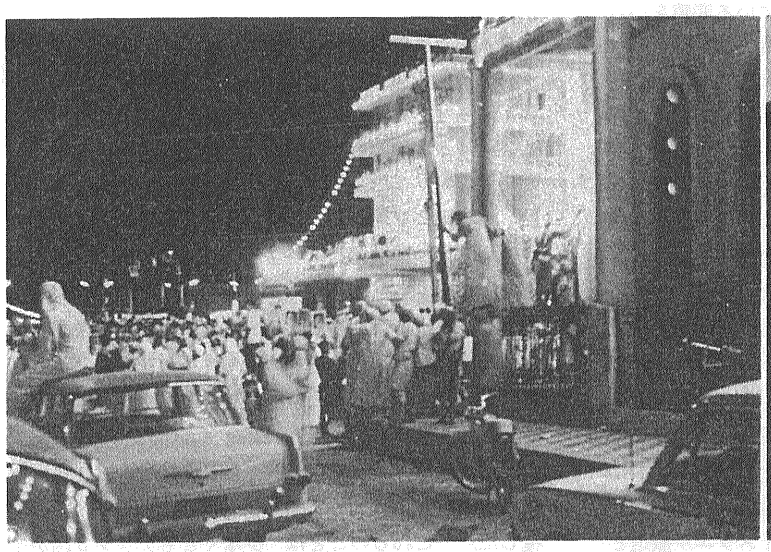
人口270万人の小国イスラエルの力の前に　1億の民を擁する巨人アラブは灼熱の野に斃れ　戦は終った.
この厳然たる事実を見て　世の人々は何を思い何を考えるだろうか.　この戦の場に臨んだアラブ3国の人口はおよそ4000万人　他の6000万人は　極言すれば　ことの成行を見守っていたにすぎない.　イスラエルを共通の敵とするアラブ諸国の動きにみられるこの不思儀な現象は何を意味するのだろうか？

戦後間もなく　占領下にある旧ヨルダン領エルサレムを訪れ　今を去る3000年の昔　エダヤに祖国と富をもたらしたソロモン王が建立した寺院の石の壁の残骸にすがり　口づけし　頬をすり寄せて号泣するイスラエルの人々の姿があった.　私たちの目には狂気の沙汰ともみえるこの不思儀な光景　その涙は　イスラエルの民にとつては心情のすべてを吐露したものであったろう.　その草むした石の壁（嘆きの壁）に流れる涙は　国を守り苦難の果てに祖先の地へようやく帰り得た喜びの涙か　または　在りし日の祖国の壮麗な姿が今は残骸と化し果てたことへの悲しみの表われであろうか.　しかし　戦後の情勢は　イスラエルの人々に　いたずらに感傷にふけり　喜びだけに浸ることをゆるさなかった.

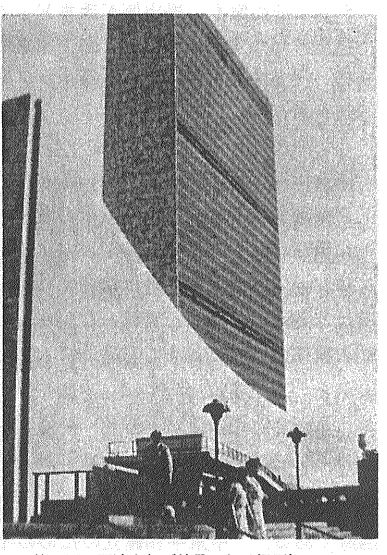
7月23日　アラブ連合のナセル大統領は　第15回革命記念日の演説の中で　国民にイスラエルとの戦に最終的勝利を得るための軍事力の増強と国家総結集を呼びかけイスラエルとの徹底的対決に国民の情熱をかきたてる一方　毎月およそ83.5億円の収益をあげ　アラブ連合経済の大動脈をなすスエズ運河の閉鎖によっておこる経済困難に耐え抜くことを訴え　第四回アラブ首脳会議開催の必要性を強調した.　ナセル大統領はこの演説の中で「イスラエルの目標は　ヨルダンでもシナイ半島でもなく　われわれ進歩的勢力である.　従って　われわれはアラブの革命運動を強めなくてはならない」と強調したが　果たしてそうであろうか.　少なくとも私には「イスラエルの真の目標はアラブ諸国にイスラエルの存在を完全に承認させることにある」と思えるのだが.

中東戦争終結処理の場は国連に移されたが　世界の真の平和と人々の幸福な生活の保障を目的とした国連での中東問題解決討議の場は　アラブ連合を中心とするアラブ諸国とイスラエルとの　それぞれの正当性を主張するはげしい舌戦の場であると共に　それぞれの背後に控える大国間の智謀策略の対決の場でもあった（第19図）.

6月17日から行なわれた国連中東緊急総会において　アラブ諸国は　代わる代わる　イスラエルの侵略を非難すると共に　その侵略に対して断固たる手段（多分アラブ側に有利な）を講じ得なかった国連の存在性についても繰り返し激しく非難した.　イスラエルの急襲侵入は確かに非難されるべきであり　国連のフンイキは　これと旧ヨルダン領エルサレムの統合という事実を中心に各国はアラブ側に同情的であった.　しかし　パレスチナ戦争・シナイ戦争後　シリア・アラブ連合からのイスラエルへのテロ行為を執拗に繰り返し　アラブとイスラエルとの武力対決回避と平和維持に努めてきた国連緊急軍の撤退を一方的に要求し　その件でカイロへ飛んだウ・タント国連事務総長のカイロ到着前にチラン海峡封鎖・イスラエル船舶のスエズ運河航行禁止という手段を講



第18図　ファイサル王の演説を聞きに集った人々と会場の Jeddah Palace Hotel



第19図　国連本部（林昇一郎氏撮影）

じたアラブ連合・シリアおよびヨルダンに中東戦争の責任はないのか．　そうしたアラブ側のやり方がイスラエルの急襲・侵入を招いたとするならば　誰が考えても　その答は「否」であろう．　国連におけるアラブ諸国の激しい態度も理解できないではない．　しかし　そうしたことによってアラブ側に有利な国連の総意を得ようと試みることは　自己の過去を反省せず　現在の自己の立場を十分に考慮せずそしてそのことによって起こるであろう結果に甘い夢を抱いた　余りにも見えすいたやり方である．　少なくともアラブ側は敗者の立場にあり　誰の目にも　アラブ側がこの戦争の責任を全く負う必要がないとはうつらないだろうし　イスラエル側はその方針の下に　アラブ側に対する和平の門戸を閉してはいない．

アラブ特有の必要以上とさえ思われる長口舌と全く対称的に　占領地区を完全に押えたイスラエルのエバン外相は　勝利者としての強い立場に立って　国連でも指折りの明析な頭脳と語学力を縦横無尽に駆使し　その巧みな弁舌で　イスラエルの正当性を主張してアラブ諸国・ソ連等につけ入る隙を与えなかった．　そして　その巧みな弁舌とアラブ側の執拗な長口舌との各国に与えた印象の差は　アラブ側の予想を完全に裏切って　イスラエルに痛痒を全く感じさせない国連の総意として生まれた．そしてその総意は　イスラエルと深い関係をもつ米英諸国の立場を一気に優位に立たせる一方　アラブ側とソ連をはじめとする共産諸国を窮地に落し入れた．　重大事態の発生によって　ソ連はコスイギン首相みずから国連の場に臨み　激しいイスラエル非難決議案を提出した直後　イスラエルの完全撤退を要求する比較的柔軟な非同盟諸国案を提出するという巧妙な心理作戦を展開した．しかし　その案も　提出側が手まどっている間隙をついて提出されたイスラエル寄りの中南米案に先を越され　結局　コスイギン首相の出場はイスラエル軍の撤退さえ実現し得なかった．

国連における応酬では　勝利者としてのイスラエルの力の論理がアラブ諸国の同情依存とイスラエル非難に徹した政策に勝り　イスラエルの完全撤退実現の手段としてはソ連の武力介入以外には考えられなくなった．　一時はソ連が武力援助を実行しなかったことに対するナセル大統領のソ連に対する非難の声もあっただけに　武力介入ということについては　当然　ソ連側においても一応は検討されたことだろうが　その実現は当然　米・英をはじめとする西欧陣営との武力対決を招き　ひいては全面戦争を誘発する恐れが多分にあるので　現段階では困難である．　中東平和確立のためのイスラエル撤退という多くの人々の願望は　国連が全智全能を傾けたにもかかわらず　熱砂に浮ぶ辰気楼と化した．　そして中東緊急総会は　開始後旬日を出ず　中断されるに至った．

多くの難問を包蔵する中東の和平確立を目的として提出されたアラブ寄りの非同盟諸国案とイスラエル寄りの中南米案をめぐって虚々実々の応酬が行なわれたことは明らかであるが　戦争終結処理のために良策が見出されないまま中東緊急特別総会が中断して後　戦争処理の実現を非同盟諸国案と　中南米案を基礎とした妥協案によって計ろうとした　ユーゴスラビアのチトー大統領案が9月18日から開催された　緊急総会において提出された．

① 国連監視団の統制の下に　イスラエル軍は戦争前の位置まで撤退する
② 国連安全保障理事会かまたは米英仏ソの4国が　戦後処理の決定的実現まで　中東の安全と国境線を保障する
③ 国際司法裁判所の決定が下されるまで全船舶のチラン海峡航行を承認する
④ スエズ運河航行については　アラブ連合が戦争勃発直前に行なった封鎖の状態とする（注：このことはイスラエル船の航行を認めないことを意味する）
⑤ これらの実施後　安保理は　紛争中の諸問題　とくにイスラエル船のスエズ運河自由航行およびパレスチナ難民問題の解決に努力する

等を要旨としたチトー案は　アラブ連合をはじめとするアラブ側にとっては強い支柱とはなったが　その内容からみて　イスラエル側に受入れられるものではなく　この総会においても問題解決は実現しなかった．　その後3国案・米案・日本案・インド案等が相次いで安保理に提出討議されたが　アラブとイスラエルの双方にとって納得のいく決定的解決案とはなり得なかった．

ウ・タント事務総長は「中東問題については　国連によって解決する以外に方法はない」むね語ったが　レバン・イスラエル外相は　この談話に対して「イスラエルとアラブとの問題解決は両者の直接交渉以外にない」と言明しており　当分の間この問題の解決は望めそうにない．　米国とソ連とが　自国の存在承認を固持するイスラエルと占領地域からイスラエルの撤退を強く要求するアラブ諸国とを　それぞれどこまで説得することができるかが今後の解決の鍵となることは明らかである．　アラブ諸国の動きには　国連の場で各国の同情をひき　全面的に平和工作でこの問題に対処する方針を放棄したと思われるふしがみられる．　ヨルダンは内閣改造を実現しアラブ連合の軍備は　終戦4カ月後には　ソ連の武器援助によって　戦前の80%　シリアはほとんど100%回復した．　これらのことは　少なくともアラブ3国がイ

スラエルに対する武力解決を完全には放棄していないことを意味するだろう．　そうした状態の下で　アラブ連合によるイスラエル駆逐艦撃沈事件が発生し　それに対する報復措置としたイスラエルによるスエズ砲撃が行なわれた（第8図）．

アラブ連合がとったこの行動が　その武力解決の前ぶれであるか否かは明らかではないが　少なくともイスラエルが　それを戦争挑発と受取り　スエズ砲撃にふみきったことだけは明らかである．　そしてその後もスエズ地域にあるいはシリアとイスラエルとの国境地域における武力衝突が間断なく繰り返されている．

イスラエルの存在承認とイスラエルの完全撤退との真向からの対立が完全妥決に至るまでにはまだかなりの時間が必要だろうが　その過程において　両者の間に全面的武力対決が発生しないと誰が保障しうるだろうか．過去幾度かのアラブとイスラエルとの戦いは　イスラエルを承認するか否かという問題に根ざして　発生した．従って　アラブ側があくまでもイスラエルの存在を否定する立場をとる限り　たとえ　中東戦争終結処理が終ったとしても　近い将来　両者間の対決の日がやってくるに違いない．　いずれにしても　私達の想像以上にメンツを重んじるアラブに　イスラエルを承認させ　それにみあう名誉ある位置を保たせるだけの良策が打ち出されないかぎり　中東地域に平和は訪れてはこない．

中東戦争後のアラブ

予想もしなかった敗者の地位に甘んじなければならなかったアラブは　8月29日　スーダンの首都ハルツームにおいて　およそ2年ぶりに　第4回アラブ首脳会議を開催し　今後の対イスラエル政策を中心に討議を重ねて

① イスラエル侵略の結果を排除するための軍事・政治・経済面における共同の努力
② 外国軍事基地の完全撤去
③ 外交分野における政策と方針

について　ほぼ意見の一致をみた．　そしてその後のアラブ諸国の政策はこの首脳会議における決定事項を軸として動いていくが　①と②の決議はアラブ諸国がイスラエルとの撤底的対立の態度を今後も保持することを示す．しかし　アラブ13ヵ国の中　この会議に元首を送ったのは8ヵ国　チュニジア・リビア・モロッコ・アルジェリアは元首代理を出席させ　シリアは会議そのものをボイコットして出席しなかった．　この事実は　アラブ諸国が　きわめて困難な事態の中に追い込まれて苦慮していながらも　結束し得ないという　重要な問題を提示する．この会議において　イラクは　イスラエル支援に対する米・英・西独への報復措置として以前に施行された石油輸出禁止の解除を提案し　サウジアラビア・リビア・クウェート等もイラク案に同調した．

石油禁輸措置の続行は国家経済の大部分を石油に依存しているこれらの国々にとっては自国経済の破綻を招きひいてはアラブ諸国に経済的弱化による勢力の後退を誘発する．　この提案はこの会議では承認されず　それからおよそ1ヵ月後の9月2日　上記3国に対する禁輸解除がようやく実現したが　非産油国の産油国に対するかなりの批判があったことは当然である．　恐らく　禁輸解除反対を押さえたのは　アラブ連合その他の戦災国に対する復興援助資金をめぐって　産油諸国の圧迫があったからではなかろうか．

アラブ首脳会議における重要議題の一つにスエズ運河開通に関する問題があった．　シナイ半島を占領するイスラエルが「国境はスエズ運河の中央を通る」と主張している段階でのこの討議は　戦後処理をアラブ側に有利に導こうとする政策に重大な影響を与えるだけに　慎重をきわめた．　月間83億5000万円の収益をあげるスエズ運河の閉鎖がアラブ連合にとって当然憂慮すべき経済危機を招くことを熟知しながら　ナセル大統領は　なぜこれを再開しようとはしなかったのだろうか．　それは恐らく　イスラエルに対する経済闘争によってより有利な地位の確保を目的としたものであると共に　米・英両国に経済悪化をもたらし　ひいては　占領地域からの撤退についてイスラエルを説得させることを目ざしたからに他ならない．　このような解釈は　1966年度にスエズ運河を通過した貨物量が北行194,168,000 t　南行47,725,000 t　船舶数21,250隻の中英国船が3,601隻　米国船が約2,000隻の実績からみて　容易にうなずかれる．しかしスエズ運河通過船舶数第1位のイギリスをはじめ各国がこの封鎖によってかなりの打撃をこうむったことは確かであるが　ナセル大統領のこの切札も　1956年のスエズ動乱の時ほど　その効力を発揮せず　その狙いははずれた．

それは　スエズ動乱で著しく迷惑をこうむった諸国が貨物の多くを占める石油および石油製品（1966年度北行は全量の約86%）の輸送対策として　希望峰まわりでも十分に採算のとれる大型タンカーの使用を実行していたからである．　たとえばアラビア湾からロンドンまではスエズ運河経由で約6,400カイリ　希望峰まわりで　約11,300カイリであるが　スエズ動乱当時18,000 t 級を標準としたタンカーがすでにその10倍前後の大型に変っていることだけを見ても分かる．　結局　ナセル大統領の

この切札は　大観すれば　その敵性国家に打撃と圧力を加えるどころか　自国により深刻な経済危機を招き　ソ連に対してはベトナム援助物資の輸送停止という不利な事態を誘発させると共に　インドにおける食糧事情の悪化に拍車をかけたにすぎない．　運河封鎖続行政策は9月中旬のリアド外相の「アラブ連合はスエズ運河の再開に向って努力している」という表明にみられるように軟化していると思われる．　しかし　アラブ首脳会議においてナセル大統領が「他のアラブ諸国が財政援助を与えてくれるかぎり　スエズ運河の閉鎖を続ける」と述べた方針が　なぜ　そのように変ったのだろうか．

アラブ連合とヨルダンが　首脳会議の決議によって　サウジアラビア・クエート・リビアから　それぞれ年間950億円　400億円の財政援助を受けることからみれば　リアド外相のこの表明には若干疑問がもたれないこともない．　アラブ連合とヨルダンとは多額の援助資金を得たが　同じ戦災国であるシリアは復興資金を全く得ることができなかった．　このことについて「シリアが援助を求めていないため」と説明されてはいるが　実際にはシリアが首脳会議をボイコットしたことに基因するのであろう．　いずれにしてもこの会議において名実共に得たのはアラブ連合であったろう．　政治家としてのナセル大統領の面目躍如たるものがある．

首脳会議において決定された諸事項の中見逃すことのできないもう1つの問題があった．　それはファイサル・サウジアラビア国王とナセル大統領とによって締結されたイエメン内戦終結協定―スーダン・モロッコ・イラクの3国からなる新委員会の監視下に　サウジアラビアの王統派に対する援助中止　およびアラブ連合軍の撤退―の成立である．　しかし　名実共にイエメンに平和をもたらすであろうと思われたこの協定は「これはイエメンの独立と主権を危険に陥入れる内政干渉であり　イエメンはこの協定成立に参加していない」とするサラール・イエメン大統領によって拒否された．

かつては志を一にしたサラール大統領のこの態度はナセル大統領にとっては決して好ましいものではなかったろう．　それは　イエメン内戦終結協定に調印したナセル大統領の真意が　中東戦争によってこうむった打撃から立直るために要する復興資金の出所を　イエメン撤退に伴う経済救済とかって対立した産油国に求めることにあったであろうことからも容易に推察される．　イエメンからの撤退は　単に経済的面だけではなく　軍備の充実という面でも重要視されることであるし　アラブ連合にとってはいわば一石二鳥の案である．

協定成立後　サラール大統領は　時にはこれの受諾を表明し　またある時点ではこれを拒否し　イエメン国内に　協定受諾の是否をめぐる不穏な政情をひき起こしたにもかかわらず　その最中に　国外旅行の途についた．そしてその直後の9月5日　イエメンにはクーデターが発生し　革命政権は　新内閣を組織すると共に　サラール大統領に死刑の判決を下した．　サラールが死刑というきびしい掟の待つ故郷へ　再び帰ることはなかろう．革命の英雄はわずか3年にして栄光の座を去ったわけであるが　その陰に　アラブ連合が　当面の自己の利益のために　終結協定を受諾しなかったサラール大統領追放の路線を敷いた事実はなかっただろうか．

苦しかった革命をナセルと共に生き抜き　その片腕として革新政権の樹立と発展に尽力したアーメル元帥が中東戦争敗戦の責を負わされて司令官の位置を更迭され自殺か他殺かは別として　死の道をたどらなければならなかった短かい生涯を追想する時　イエメン革命の立役者サラールにかぶせられた死の宣言に何か割り切れぬものが感じられてならない．

クーデター後樹立された革新政権の平和使節団受入れによって　内戦終結協定の実行が可能となり　アラブ連合軍は12月31日にイエメンから撤退することになった．内戦に苦渋した神秘の国イエメンにも　1968年の初春を迎えて　平和が訪れるわけである．

今　後　の　問　題

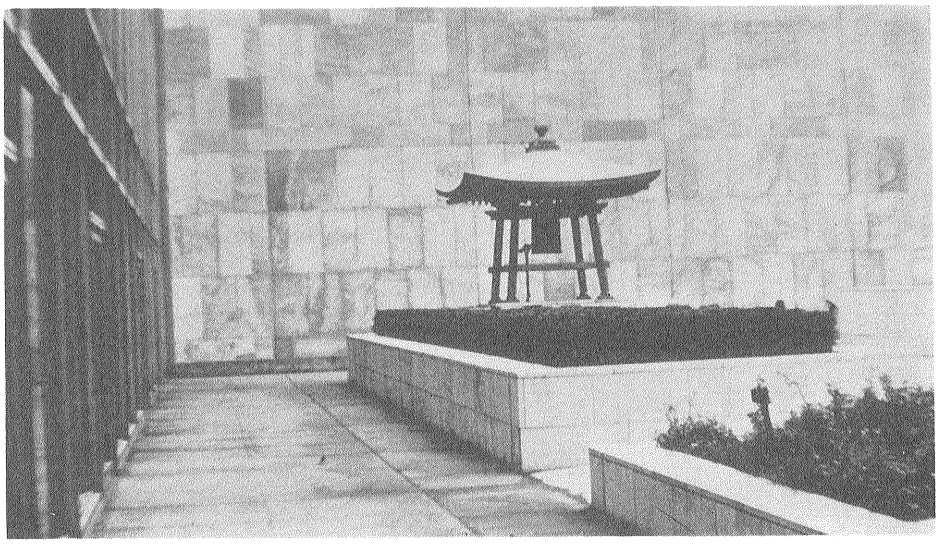
中東戦争停戦成立後のアラブとイスラエルとの衝突は国連の厳重な監視下にありながら　後を絶たない．　中東平和確立のために　苦渋の日を重ねながらも　真剣に事を進めつつある国連が　アラブとイスラエルの双方に互譲の政策をはっきりと表明させ　その憲章に謳われた責務の遂行を　世界に認めさせ得るのは何時の日だろうか．　もしその対策確立の日がはるか彼方に浮ぶ砂漠の辰気楼のごときものであるならば　近い将来　中東戦争の完全終結を見ないまま　アラブとイスラエルとの全面的武力対決が起こりかねないだろう．　アラブ連合とシリアの軍備はほとんど戦前の状態に復し　革新諸国の中でももっとも過激なシリアは　アラブ連合・シリア　イラク　アルジェリアを統合した社会主義国家を創設してイスラエルに対して決定的報復を加えることを　これら3国に強く呼びかけており　アラブ連合自体武力解決を諦めてはいない．

中東戦争という事件を境にして　アラブ諸国間に友好関係が生じたことは事実である．　しかし　アラブ首脳会議に対する各国の態度には　まだ真の統一には程遠い

感じがある．　もし　たび重なる戦争の恐怖から脱脚しその存在をアラブ諸国に認めさせることを目的として勝者としての強硬な政策を押し進めつつあるイスラエルとの間に平和が締結されるか　あるいは　勝者と敗者との座が完全に変る日が来たとしても　アラブ13カ国の間に真の平和が訪れることは中々困難であろう．

経済力および政治形態・思想の相違に基因する長い間の対立は　アラブ特有のメンツを重んじる　いわば責任回避という先天性を加えて　一朝一夕には　氷解しそうもない．　世界の噴火口と呼ばれる中東に真の平和を確立し　それを　犯されず　永久に保持するための最良の策は何か．　これは　ただ国連・アラブ諸国・イスラエルに課せられた問題ではなく　等しく生きる権利と義務を有する私たちに与えられた課題でもある（第20図）．

（筆者は鉱床部）



第20図
日本から国連本部へ寄贈した「平和の鐘」（林昇一郎氏撮影）

新刊紹介

地球科学入門
～その歴史と現状～

この本は　表題からみれば初心者むきの地球科学の教科書のようだが　その内容は地質学を中心とした地球科学史である．　日本でまとめられた総合的地質学史（世界を通覧した地質学史）としては　戦前に出版された小川琢治・笹倉正夫共著の「地質学史」（一）（二）（岩波講座　1933・1934）と　戦後出版された小林英夫・岡邦雄共著の「地学史」（中教出版　1954）とが代表的なものであろう．　前者は地質学者の業績を分野ごとに羅列したもので　地質学史の概要をつかむには　それなりに便利な本だが　それぞれの分野の学問の流れや相互の関連をこの本から読みとることはむずかしい．　後者の地質学部門の担当は小林英夫氏であるが　同氏は前書の欠陥をみごとに補ない　さらに多くの資料を加えてすぐれた地質学史としてまとめている．　しかし　おしいことに戦後の地質学が扱かわれていない．　山下昇氏の本書は　このような意味で待望久しかった本である．

本書は14章からなる．　著者は第Ⅰ章～Ⅻ章で古代から現代までの地球科学の歩みと　時代ごとに　その時々の代表的な学問の流れを中心にしてまとめ　第XⅢ章で地球科学史の時代区分を行ない　第XⅣ章のまとめで地球科学の体系について論じている．　本書を一読して感じられることは　過去の学説や人物を忠実に紹介しながら　それらを大きな歴史の流れのなかに適確に位置づけていることである．　著者の見解は明快な文体と鋭い説得力で読者にせまってくる．　そのために　とかく空虚になりがちな地質学史を生き生きとしたものにしている．　とくに　19世紀末から急速に発展した地球物理学　地球化学と従来の地質学との関連など　現状を理解する上に参考になることが多い．

慾をいえば　ギルバートやデービスらを中心とする19世紀末のアメリカ地質学発展の動向についてふれてほしかったし　堆積学や鉱床学についても頁数をさいてほしかった　ライエルやヴェーゲナーの評価には異論がないわけではない．　しかし　これだけの内容のものを一冊の本にまとめあげることは　なみたいていのことではなく　著者の多大の労作には感謝の外ない．地質学専攻者ばかりでなく広く一般の人にもおすすめしたい好著である．（今井　功）

（東京都文京区目白台1—17—6
Tel 東京（03）943—3721）

地球科学入門　山下　昇著
発行所　国土社
219頁　750円　1967年10月発行